

LAP

Life AIDS Project

NEWS LETTER

Vol.32

2001.10.





Vol.32 2001.10.



Life AIDS Project News Letter Vol.32-PDF

2001 AIDS文化フォーラム講座

知った気でいるあなたのためのセクシュアリティ入門 3
70年代から変わったこと、同性愛の授業、性同一性障害 [木谷麦子]

いま、ひとり一人ができること

「2001 AIDS文化フォーラム in 横浜」参加報告 8

公衆衛生医からのエッセー

とりとめのない話 ～1.わかりあう～ [JINNTA] 13
理屈を教える教育、「わかりあう」という教育

全国から35団体が参加

2000年度ボランティア指導者研修会報告 [新ヶ江明遠] 16
組織のマネジメント、予防啓発活動の展望、当事者参加型リサーチ

東京都エイズ相談連絡会

「HIV感染不安者への対応について」 [ふじもと] 19

検査を真に感染予防につなげるために

感染を知らない自由の尊重が必要だ [草田 央] 20
「感染者のため」という錦の御旗、検査が健康維持の手段に

LAPホットラインエイズ電話相談案内 7

LAP入会案内 12

PCMモニター募集案内 22

HIV・エイズ関連新聞記事 25

○無料送付のお知らせ

LAPニュースレター
18～22、27、29号は
社会福祉・医療事業団
(高齢者・障害者福祉
基金)の助成事業の
ため希望者には無料
で送付しています
(一部品切れ)。詳し
くは24ページをご
覧ください。

ライフ・エイズ・プロジェクト (LAP)

〒100-8691 東京中央郵便局私書箱490号
TEL03-5685-9716 FAX03-5685-9703

[電話相談] TEL03-5685-9644 (毎週土曜日午後4時～7時)

[郵便振替] 00290-2-43826 加入者名:LIFE AIDS PROJECT

[銀行口座] 三井住友銀行横浜西支店 695729 (普通)
「ライフエイズプロジェクト代表 シミズシゲノリ」

[電子メール] lap@lap.jp ※◎を@に変えてください

[ホームページ] <http://www.lap.jp/>
<http://www.campus.ne.jp/~lap/>

注：2001年4月から銀行名と支店名が変更されました。口座番号の変更はありません。

知った気でいるあなたのための セクシュアリティ入門

木谷麦子

「とくに、同性愛やトランスジェンダーについての授業は、ぼくの性についてのものの見方を根本から変えてくれた。知識は風化していくけれど、一度変えてもらったものの見方は、次のができるまで生きつづける」――

ある高校生が卒業するときにこんな文章を残した。同性愛ってなんだ？ トランスジェンダーってなんだ？ 性についてのものの見方って？ そんなこと知らない人歓迎。そして、そんなこと知っているというあなたといっしょに、「次」の見方をめざしましょう。

※今年8月に開催された2001AIDS文化フォーラムin横浜での講座を講師の木谷さんに再構成していただきました。

「1」七〇年代くあれから変わったこと、変わらないこと

7月にじつに久しぶりに高校時代の友人6人と恩師で食事会などやった。その席でしみじみ思い出してみれば、この面子を毎日合わせていたのは一九七六年、ちょうど四半世紀前ではないか。というわけで、思わず時を振り返ってしまった。

この6人は、高校3年の9月という時期に新しいサークルを立ち上げた馬鹿者だった。「女性問題を考えるサークル」、この表現自



木谷麦子氏

体がいまや古色蒼然としているが、フェミニズムという言葉がまだ一般化していなかったんだなあ。翌年大学に入ったら、「両性問題研究会」というのがあって、

この問題は女性だけでなく男性の問題でもあるんだ、という見方をしている人たちも、当時からいたわけだ。

七〇年代といえは、セクシユアリテイ（イマの言葉だなあ）に関しては、一つの転機であった時代といえる。七〇年安保の敗北以来、「若者が無気力になった」といわれた時代であったが、これは「若者」というとオトコしか目に入らない前世代のオヤジ（つていうか今はじーさんだけど）の見方であるともいえる。なんののかんのいつて男性原理で動いていた学生運動の後、経済と文化の爛熟期を迎えて、女性の方は、元気になっていった。もちろん、戦後民主主義から学生運動にいたる道で、徐々に元氣になってきていたのだが。

女性が初めて政治ニュースを読むことがニュースに

NHKの7時のニュースで、女性が初めて政治ニュースを読んだ

のもこの時代。それまでは、政治のニュースは男性が読み、女性はお天気とかまあ、そんなところと決まっていた。「女性が初めてニュースを読む」ことそのものがニュース性をもって事前に新聞などで論じられ、高校では社会の教師が話題にし、それでいて今から思えばものすごくわざとらしいシチュエーションでこの日のニュースは女性によって読まれたのだった。

テレビで生理用品のコマーシャルが流れたのも七〇年代。それ以前は、生理は暗く、女性自身が女性性を否定したくなるもののシンボルとしての意味ももっていたが、じつにこのときを境に「単なる生理現象」への道がはじまるのだ。

また、今回のお題に直結して言えば、ゲイやレズビアンサークルが、しっかり活動を始めた時期でもある。女性問題関係のミニコミを扱っているところで、「女か

木谷表子さんの主な著書



『知った気であるあなたのため
セクシユアリテイ入門』編著（夏
目書房、一九九九年、二六〇〇円）



『ある日はくは「AIDS」と出会った』（采平社、一九九八年、一四〇〇円）

ら女たちへ」というレズビアン・フェミニストのミニコミを読んだりしたものだ。

自分の高校のときの話が自分自身にとってこんな「隔世の感」を感じさせるものだとはちょっと愕然とするが。しかし一方、変わらないこともある。

「ジェンダー」の本は書店のどの棚にあるだろう？

本屋に行ってみよう。「ジェンダー」「セクシユアリテイ」に関する本は、どういう分類の棚にあるだろう？ 結構大きい本屋でも、「女性」のところにあつたり

する。「福祉」なんかの横に「女性」という棚があり、そこにジェンダーの本は置いてある。下手すると、ゲイについての本もここにある。女性じゃないつてば、と突っ込みを入れてみても、25年前に「両性問題研究会」を名乗った人々の認識さえ、結局のところ

大勢にはなっていないのだ。これだけじゃない。ずいぶん柔軟になったように見えながら、根幹は変わっていない。柔軟になったために「声高に批判する人々」がワルモンの役回りになってしまつたりして、あんまりよろしくない傾向さえある。あの、最初の「女性が政

治を読む」ニユースのシチュエーションのわざとらしさは、それでもいまのやわらかさを作ってきたのに。

でも、こんな状況の中で、やっぱりもつとやわらかくなりたいのだ。四半世紀前の高校生だった自分以上に、私はそう思っている。

「2」「同性愛」そしてセクシュアルオリエンテーションの授業

私は、一九八八年から、「同性愛」く「セクシュアルオリエンテーション」についての授業を、10代の学生に向けてやってきた。これも思えば13年、学生の反応も、私自身の授業も変わってきた。

初期のころは、もろに「同性愛について」の授業だった。「男性同性愛者」が、HIV感染の「ハイリスクグループ」と呼ばれていたところだ。サンフランシスコの様子なんかを見てきて、促成の人権ミーハーだった私は、「同性愛者



を差別しちやいかん」と、まあ、そのまんま言わないまでも、そういう趣旨の授業をしていた。

いい反応をする学生もいたが、はつきり反発する学生もいて、後者と私との激しい応酬で授業が終わってしまおうということもあった。数年後、ゲイブームがやってきたときに、私は方法を変えた。

ゲイブームを機に生徒の反応が積極的なものになった

ブームに乗った女の子たちは、情報をたくさん持っている。さら

に、それとはちがう情報をもっている私の話を聞きたがった。たんなるファッション的興味であつて本当のゲイへの理解ではないという指摘もあろうが、少なくとも、彼女らによつて、「同性愛の話を授業ですること」が、「楽しい・積極的な雰囲気」に変わったのだ。

「差別をしちやいかん！」という授業の不毛な論争

現代では「差別」することは悪いことだ。「同性愛者を差別しちやいかん」という論調の授業をする、抵抗感を持っている学生は「おまえは差別者で悪いやつだ」と言われているように思う。そして自分を守るために攻撃的になる。さらに反論されれば、同性愛者を非難することで自分を正当化しようとする。結果、最初実際に感じていた以上に拒否的なことを大声で言ってしまったりする。そして、彼らへの対応に迫られる教師は、関心を持っている学生、情

報を必要としている学生に目配りする間もないまま、不毛な論争で熱くなつて、授業が終わる。

ブームを導入に使うと、こうした不毛な論争を抑えて、自然に授業に入っていくことができた。

同じバランスで存在するところが自然で日常的で現実的

さらに、ゲイやレズビアン自身も変わってくる。九〇年代の初め、ピアカウンセリングをしていたレズビアンにこんなことを聞いた。「最近の若いコは、同性愛自体で悩んでいるというより、同性を好きなことはそれでいい。ではどうして生きていけばいいか、どうすれば快適に生きられるか、と考える傾向があるようだ」なるほど。たとえば「女性」と考えるとする。授業で「女性はこんなに差別されている！」と言つて、レイプや法的問題を羅列されて、「差別するな！」という教師と、「女なんかだめだ！」とわ

めく男との応酬から構成される授業が、女性にとつて有意義かというところ……私ならうざいだけだ。(もちろんそういうことについて意識の低い女の子たちも不安だけだ)。

かくして、私の授業の中では、同性愛・両性愛・異性愛、すべてが同じバランスで存在するということが、自然で日常的で現実的なんだよーん、という感じでいくことにした。結局それを前提として出してしまったほうが、大方の場合、内容に広がりが出た。

[3] 性同一性障害

これについて授業でまとまってやるようになったのは九五年くらいからだ。じつは八八年の時点から、触れてはいた。

当時、黒柳俊恭氏とお会いする機会があり、資料なども紹介してもらったのだ。氏の著書『彷徨えるジェンダー』も、当時出たばかり

性同一性障害 (GID) の分類

トランス・ヴェスタイト

普段は体の性別にとくに違和感は強くないが、ときどき、異性の服装をしたくなる。そのときは、心の性別が、体の性別とずれている。

トランス・ジェンダー

違和感は常にある。周囲の人が、自分の本来の(心の)性別で認識し、つきあってくれることをのぞむ。

トランス・セクシュアル

違和感は常にある。身体違和が強く、投薬・手術などで、体を心にあわせて治療することを必要とする。

※アメリカ精神医学会による3分類

Male to Female

Female to Male

からだ：男性

からだ：女性

こころ：女性

こころ：男性

りだった。これは、新宿2丁目の「男性を好きな女装者」を中心とした、学問的フィールドワークの本だった。「女装者と同性愛者を混同している」「セクシュアリティの問題を学問で切ってしまうている」などの批判も浴びた本だ。

だが、今思うと、黒柳氏の焦点は最初から中間的でデリケートな部分にあったのであり、ある意味で「早すぎた」のかもしれない。

GIDとは体の性別と心の性別が合っていない事

Gender Identity Disorder (性同一性障害) は、体の性別と、心の性別が合っていない事。例えば私が、女性型のボディをもっている。しかし、それに違和感を感じ

る、「これはちがう」と感じるのが、GIDである。
アメリカ精神医学会は、とりあえずその中で3つに分類している。これは医療の都合上の分類ともいえるし、また、検討中で可変のラインだともいえるが、いちおう「入門」のためにも紹介しておく。(上図参照)

社会的性役割 (ジェンダーロール) とは違うジェンダー
体が男性で、心が女性である場合を M t F (Male to Female)、体が女性で、心が男性である場合を F t M (Female to Male) という。

「トランス・ジェンダー」の「ジェンダー」は、いわゆる女性問題のジェンダー・ロールとはちがう。前者のジェンダー (ロール) は、社会的性役割、社会が、特定の性別の特質、あるいは役割だと思っているものである。家事をするのは女性、論理的なのは男性、とい

うようなものだ。しかし、保阪尚輝はG I Dではなく単に「料理をする男」であろう。G I Dについて使われるジェンダーとは、自認における性別である。

体の状態が男性のままでも心の性別が女性なら女性

G I Dは、「性別」は、体がそのときどのような状態にあらうと、心の性別のほうで考える。セクシユアル・オリエンテーションも同様だ。

たとえば、一人のM t Fがいたとする。自認が女性なので、体の状態が男性ままでも女性である。この人が、女性を好きになったとする。女性が女性を好きになるのだから、同性愛。この人が男性を好きになったとする。女性が男性を好きになったのだから、異性愛である。

オトコが女になりたがるのだから男が好きに違いない!?

最近はいびちがって来たが、それでも一般には男性同性愛者とM t Fは混同され、なおかつ、M t F、オトコが女になりたがるのだから男が好きに違いないという文脈になっている。実際には、身体に違和感がない男性と、男性のボディをもちつつ違和感を持っている人はちがう。

ここは大切なポイントだ。

しかし、ここを分けすぎると、現実にいる人たちを否定してしまう場合もある。私の知っている人で、ゲイでトランス・ヴェスタイトである人がいる。彼はふだんは「彼」であり、男性が好きである。月に一度くらい、どうしても「女装」がしたくなる。(まさに黒柳氏が焦点を当てたところに立つ人なのだ。)

セクシュアリティの分類は「入門のときに便利な目安」

セクシュアリティについての分類は、どんなものであっても、

「入門のときに便利な目安」である、くらいに思っていたほうがいいかもしれない。

分類の中間的なところ、あるいは分類の間を移動すること、人間のセクシュアリティは、むしろそんなふうに変えたほうがいいのかもしれない。

「4」話しきれなかったこと、書ききれなかったこと

セクシュアリティがそんなようになわけなので、この稿はとりあえずの「まとめ」。話したけれど書ききれなかったことは、「セクシユアルオリエンテーション・イベント説」「フェティシズム」「セックスレス」など。

またいずれ、機会があったらお話ししましょう。
「木谷麦子」



LAPホットライン エイズ電話相談

03-5685-9644 毎週土曜日16時~19時



いま、ひとり一人ができること

「2001 AIDS文化フォーラム

in横浜」参加報告

8月3日(金) 16時〜18時

まっぴらPositive

?????

パトリック&紳也

※ HIV(+)のパトと主治医&友人の紳也ドクター。二人は二人三脚でパトの中のHIVと共にPositiveに生きてきたことを振り返る楽しいトークショー。現在週刊誌「SPA!」の連載をしながら、自ら経営しているバーで働いているパトさん。紳也ドクターが司会しながら、パトさんに話を伺うトーク形式で和やかなムードで始まった。

「どうしてHIVを持っていると、苦にしないやいけなのかな?」と昔から明るい性格のパトさんは不思議に思っている。

「今まで35年生きてきて一番良かったことはエイズをもらったこと」と言い切る。その明るさの秘けつは「毎日の生活の中で常に自分の気持ちのコントロールを考えている。今日はどんな気分なのか?」そして「人と話すことで自分の気持ちを落ち着かせている」と。「コミュニケーションは自分のためにある」「コミュニケーションをとることがストレス解消になっている」

「世の中コミュニケーションスキルを持っていない人が多いけど、コミュニケーションスキルは絶対必要」と呼びかけていた。

「自分はこう考えているけど、どう思いますか?」そんな話ができる相手がいたほうが楽しい。「誰でも彼でも相談するのじゃなくて、尊敬できる、例になれそうな人に相談しよう」
「こんな言葉が象徴しているように、感染したことにより、自分と向き合いながら生きてきた言葉には重みがあった。エイズに限らず生きていく中でコミュニケーションの必要性を痛感した。そんな彼



でも「自分の病気のことを人への告知について悩むことが多い」ように、「感染の可能性ゼロのセックスをしても、エイズという言葉で相手がビビってしまう」のが残念と漏らしていた。(セリ)

8月4日(土) 10時〜12時

結局、やっぱり、コンドーム

岩室紳也

HIV感染予防にはノーセックスかコンドームしかない。しかし、コンドームが生活習慣にな

※プログラム解説文より。以下同。

2001AIDS文化フォーラム
in横浜ホームページ
<http://www.yokohamamca.org/AIDS/>



4日午後の「バリアについて考える
パラリンピック金メダリスト成田真
由美&桜屋伝衛門」はインターネッ
ト中継された <http://www.i-aids.org/>



っているかと言えばNO!であ
る。新しいメッセージつきコン
ドームにこう期待。
自他ともにみとめる(?) 達人
によるコンドームの正確な使用方
法についてのプレゼンは、男性3
名の実演もまじえて「ほんとうに
けっこう難しいんだな」と参加者
が理解するのに効果的であったと
おもいます。実際には、暗闇で、
ときにアせる状況でつけたりはず

したりするわけですから、「事前
学習」や「実習」が必要なのでし
ようね。
コンドームだけで感染を防げな
いSTDもあり、また破けたり外
れたりの事故も多いコンドームで
すから、「その先」の情報も必要
でしょう。参加者はすでに「よく
知っている」人が多かったようで
した。(堀成美 HIV/AIDS
S看護研究会)

8月4日(土) 10時~12時

学校や地域で役立つ朗
読ワークショップ

H.I.Voice Act

Hi.Voice誌を活用した朗読ワ
ークショップを実施しそのスキ
ルを伝える。学校や地域で実施
した具体例を紹介し、各地での
応用を期待する。

この講座では、まず会話やスキ
ンシップによって、参加者同士コ
ミュニケーションをとることから
始まり、これにより会場の雰囲気
が和んだところで、エイズに関わ
る様々な人の声を集めたHi.Voice
誌を用いた朗読ワークショップが
行われました。また学校で実施さ
れた朗読ワークショップのビデオ
紹介などをもとに、学校や地域で
朗読ワークショップを行う際のス
キル(1. リラックスすること
2. 楽しむこと 3. 感じること)
が伝えられました。

学校や地域でエイズについて学

ぶ場合、感染経路や感染防止等の
知識面を学ぶことはもちろん大切
ですが、それと同様に、感染者の
気持ちや感染者のまわりの環境を
知り、「何か」を感じ取ることは
とても大切なことだと思います。

その「何か」を感じ取ることで
きる時間が朗読ワークショップに
あると感じました。また私自身朗
読ワークショップに参加して、一
人での朗読や黙読では得られない
ような場の一体感のようなものを
感じることができました。

この講座をきっかけに、全国各
地で朗読ワークショップが実施さ
れ、より多くの方々に「何か」を
感じ取る機会が与えられればと思
います。(坂東裕基)

8月4日(土) 13時~15時

セイファークセックス講
座「prosex」

講師: 桃河モモコ
AIDSネットワーク横浜

エイズの正しい知識・予防教育

の普及をはかるため来場者と共に考え質疑を交わす参加型講座を企画した。

題名と講師にひかれて参加したこのプログラム。

まずはじめに体位について48あるということ、そのうち連続した16を実際にみせてもらった。このよいところはコンドームがはずれるのを防ぎ、無断でコンドームをはずすのを未然に防ぐことができるということだった。笑顔でしていたことが印象に残った。

次に、講義があった。セイファーストというところで肉体的・精神的・社会的な安全があるということだった。

精神的安全とは気持ちが悪くない、気持ちの安全ということ、私共共感的に受け止めた。40代男性の中には少なからず、浮気がばれると病氣や望まない妊娠よりも社会的地位を失うことを気にしている人がいる、ということ、何で

気持ちが寂しいんだろうと私は思った。

セイファーストにはコンドームを使うことが大切で、すぐに出来る場所に置いておくことよ、それから「私はこうしたい」と伝えることが大切といっていた。

最後の質問のところ、子どもの虐待・性的いやがらせについて触れ、子どもがしたいこと、したくないことをはっきりわかり、いやだと思ってもよくて、そこから逃げてもいいんだということを知らせる活動があるということ、子どもの頃から人権とかブライドとかコミュニケーション能力をしっかりと育てていく必要を感じた。

性産業の現場で働きながら若者たちにセイファーストを伝えていっているモモコさんに頼もしいものを感じた。

これからも本当の話をきかせてほしいと思った。

(穂中英美梨)

8月4日(土) 16時〜18時 国連エイズ特別総会報告

AIDS&Society 研究会議
樽井／慶応大学教授 富田／サ
ンケイ新聞

6月25日〜28日にニューヨークの国連本部で開かれた国連エイズ特別総会について、政府代表団のNGO代表、取材にあたった記者から報告。

AIDS&Society 研究会議の定例会もかねているようで、よく見るひとたちが多かったです。

国際社会での合意や約束は、国内の政策などにも影響します。今回の会議はいくらかお金を出すか、日本は何のイニシアチブをとるか、ということについて内外の関心を集めていました。

本番の総会以前また始まってからも水面下交渉で話が決まるそうです。本会議はいわば「発表朗読」の場。サテライト会議は全部把握しきれないほどあり、全体がどう

動いて流れているのかは理解しにくい、という話でした。

最終的に出された「コミットメント宣言」では、各国とも国際社会だけでなく国内の政策にも課題をもち、2003年までに政策立案がたち、2005年には評価を行えるようにする、となっていました。

今の日本の各種の政策はあまりクリアではないようにおもいますが、「外国」という比べるものがあったときに、どのような方向へ行くのかは楽しみです。(堀成美 HIV/AIDS看護研究会)

8月4日(土) 16時〜18時

保健婦―「普通」を守る 仕事の難しさ

講師：庄田智彦

Peer Network
Yamagata (ぴに)

「保健婦」の筆者、庄田智彦氏を迎え、HIV/AIDSにおける保健婦の役割を改めて検討

ついで。

山形県で保健婦として働く、渡
會睦子さんは結核が優先の現状で
エイズがどこまで近づけるか、結
核は連携が取れているのに、エイ
ズは周囲の理解がされていない。
そんな中、独自に検査を受けやす
い環境作りを工夫している。例え
ば、検査を受けにくる人が、でき
るだけ人と接することなく検査を
受けられるように、受付を無人に
し、採血をする人が、カウンセリ
ングをするなど、専任担当者制を
とって対応している。その結果、
検査を受ける人の抵抗をなくして
いる。そして、口コミで検査が受
けやすいということが広まり、検
査を受ける人も増えてきているとい
う。「予算がなくても大丈夫。こ
んな工夫が全国的に広がればいい
のに」と期待をしていた。

最後に『保健婦―「普通」を
守る仕事の難しさ』（家の光協会）
の著者の庄田智彦氏から一步踏み
込んだ、次のような意見がだされ
た。
予防活動は感染した後の生活が
サポートできるようにならなけれ
ば、継続されない。そんな中、予
防が正しくコンドームをつけよ
う、だけで済んでしまっている風
潮に疑問を感じる。そうすると、
子どもを産みにくくなる可能性も
ある。根本的なコンドームの意味
はなんなのか？ 考えてもらいた
い。また母子感染については、12
人に1人の割合で感染するという
事実がある。最初から、そのリス
クを背負って産むということに関
して、産まれてくる子どもの人権
はどうなるのか？ このようにエ
イズの問題はエイズ患者だけで考
えられるものではない。個人個人
が自分の問題として、愛する人
のため、周囲の人々の気持ちを考
え、人間的に見ていかなければな

らない。個人では守りきれない今、
社会全体が協力しないと成立しな
い。（セリ）

8月5日（日）10時〜12時

知った気であるあなた
のための「セクシユア
リティ入門講座2」

ライフ・エイズ・プロジェクト
（LAP）

昨年、ご好評いただいた「知っ
た気であるあなたのためのセク
シユアリティ入門講座」の第2
弾。講師は木谷孝子氏です。

昨年に引き続き二度目となる
「セクシユアリティ入門講座2」。
今回は木谷さんの体験と記憶によ
る70年代の女性問題、80年代から
90年代の同性愛、トランスジェン
ダー等のテーマとの出会いや、キ
ンゼイスケールの考え等をもとに
ホモセクシユアル、バイセクシユ
アル、ヘテロセクシユアル等、
様々なセクシユアリティについて
話されました。

LAPは展示ブースで『リスク・
スケールづくり〜異性間的接触
編〜』の実習を行いました



講座では、セクシユアリティに
関して今回はじめて考えたとい
う方、ある程度知識のある方等様々
な方からの木谷さんへの質問もあ
り、様々な視点でセクシユアリテ
ィについて考えることができました。

今現在学校でどういった性教育
が行われているのかは分かりませ
んが、少なくとも私自身が小、中
学生の頃は、性教育でセクシユア

リテイが多様であることを学ぶことはありませんでしたし、その性教育はむしろひとつのセクシュアリティを前提としたものであったと言えるかもしれません。それぞれ同じ人間のひとつの性のあり方として「セクシュアリティが多様である」ことを今だけだけの人が認識しているのでしょうか。エイズ文化フォーラムだけでなく、全国各地の教育現場や地域でセクシュアリティについてもっと考えていかなければならないと感じました。

(坂東裕基)

文化フォーラムに参加して 来年もぜひ参加し、また多くのことを学びたい

坂東裕基

今年で二度目の参加となるエイズ文化フォーラム。昨年同様に学ぶこと、感じることの多いとても充実した三日間でした。

今回の参加を通じて感じたこと

は、前回もそうでしたが、やはり感染する可能性の高い十代から二十代や、一般の方々の参加がまだまだ少ないということです。広く市民に開かれているはずのエイズ文化フォーラムがエイズに対する社会的関心の低下とともに、専門家のためのフォーラムになりつつあるように感じました。十代から二十代、一般の方々に参加を呼びかけるとともに、今後はエイズに関してこれからはじめて考えようとする人や、まだ感染者に対して抵抗のある人でも参加し発言できるようにプログラム作りも必要になってくるのではないのでしょうか。

また私は今回のエイズ文化フォーラムを通して、たくさんの方を学んだだけでなく、たくさんの方と知り合い、様々な考えを聞くことができました。来年もぜひ参加し、また多くのことを学びたいと思います。

(坂東裕基)

※2002年は8月2日〜4日に

開催予定とのことです。

あなたにしかできないことを、そして あなたにもできることをお手伝いください

ライフ・エイズ・プロジェクト (LAP) は「HIV感染者・患者のためのサポートグループ」として、93年2月に発足しました。以来、感染者・患者のための宿泊、休憩施設「PHAシェルター」の運営をはじめ、電話相談、パディ活動、交流会、ニュースレターの発行、勉強会・研修会の開催などの活動を行っています。

LAPではこうした私たちの活動を支援して下さる「会員」を募集しています。会員制度は、LAPの活動を維持し、できる限りの支援活動をしていくための人と資金を確保するための制度です。会員の皆様にはニュースレターや勉強会・研修会等の各種資料をお届けいたします。まだ会員の登録をされていない方はぜひ、希望する会員の種類とお名前、ご住所をお書きの上、郵便振替でお申し込み下さい。

個人会員 (維持)	年会費	5,000円	(一口。何口でも可)
個人会員 (一般)	年会費	3,000円	
個人会員 (学生)	年会費	2,000円	(但し、相談に応じます)
団体会員 (営利)	年会費	30,000円	
団体会員 (非営利)	年会費	10,000円	(但し、相談に応じます)
資料送付料 (非会員)	年間	3,000円以上	
振込先:	郵便振替	00290-2-43826	
	口座名義	LIFE AIDS PROJECT	



お問い合わせは 〒100-8691 東京中央郵便局私書箱490号 LAPまで

とりとめのない話

1. わかりあう

公衆衛生医師
J I N N T A

今回のテーマは、私などよりも
つとすぐれた書き手がたくさんい
らっしゃると思う。内容も整理さ
れていない。だから、ただの書き
散らし文と思って読んでいただき
たい。いつの日か、もう少し整理
して、ここにエッセーとして書け
ればと思っている。
また、どうしてもすっきり書く
ことができないため、言葉足らず
で誤解を与える表現があるかもし
れない。あらかじめ謝しておきま
す。

大きいか小さいかは主 観的な問題

さて、普通は、どのような人
(家)にも何らかのトラブルや抱
えている問題がある。そして通常
はトラブルを克服する努力をする
か、トラブルを受け入れる努力を
する。失業、借金、家庭内の不和
子どもの成績が悪い、嫁姑の確執、
近所とのトラブル、病気などいろ
いろなことがある。それを克服、
努力できないとき、人や家は崩壊

にむかって進んでゆく。それが大
きいものなのか小さいもののか
は主観的な問題であって、どうや
っても客観的に評価することがで
きない。どうしても人間は主観で
生きるものなのだと思う。だから
「些細なこと」というのは人が
言うことであり、当事者にとって
は本当に地獄なのだろう。まして
や、よく見られる「人間ができて
いなかったのだな」などというジ
ヤジメントは本当に余計なこと
だろう。崩壊してしまった時に
「こんな些細なこと・・・」
と周りが泣き、悔しがるのはまた
別だけだ。

しょうがい関係の活動 で目にした「現実」

たいしたことはしていないけれ
ど、私はエイズ関係やしょうがい
関係の活動に携わってきた。一昨
年環境ががらりと変わって、忙し
い中、活動は停止状態で、なか
かものごとをゆつくり考える余裕



が持てない今日この頃である。さ
て、このような活動にかかわって
きた中、いろいろな現実を目にし
てきた。今回は主にしょうがい関
係の活動をベースに知ったことを
述べてみたいと思う。

エイズの活動と共通す る部分

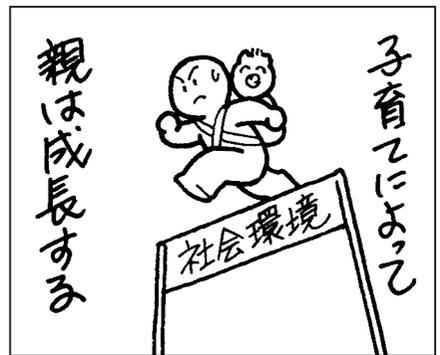
私はいつもエイズの活動としよ
うがいの活動がともに共通する部
分があると認識している。エイズ
の活動は必ずしも盛り上がりついで
るとは言えないし、地方への拡散

も進んでいるとは言えないが、着実に活動は進んでいると思う。一方で、しよがいがいに関する活動は、しよがいがいを持つ人やその家族の数が多くこともあるのか、かなり多くのものが行われている。そのうち私は主としては知的しよがいがい児の親の活動に関係してきた。私自身は現在のところ当事者ではないため、少し距離を置いて見

きている（なお、この場合の当事者とは、本人と家族などしよがいがい側の人間をさし、利害関係や交渉の相手側を意味しない。通常、しよがいがいの領域で当事者と言った場合はしよがいがい側の人間のみをさして言う）。

社会環境のハードルが著しく高い

知的しよがいがい児の親の活動は、その名の通り親の活動である。従ってそこには親の教育観や人生観が入ってくる。子育てによって親は成長すると言われるが、それ



はしよがいがい児の子育てでも同じである。しよがいがい児の親は、しよがいがいを持たない子ども親に比べると社会環境のハードルが著しく高いため、いわゆる普通の人生では経験しないことがらを多く経験しなければならぬ。そしてその社会環境を克服する努力が大きく人生に被さってきて、これは客観的に見れば「余計な部分」である。だから、親の会の活動をしている親の中には、本当に人間的に「できた人」が多いし、いろいろな考えを理解する柔軟さを持っている人も多いと思う。

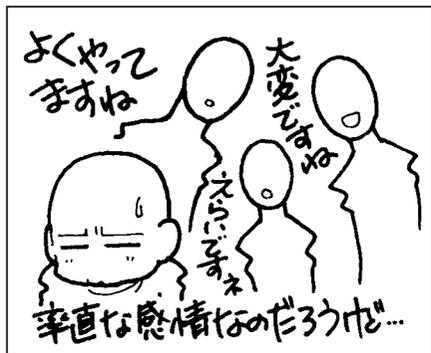
現実の対応への足かせにもなる主義主張

当事者の方を見ると、まず、みんな自分のことで一生懸命だと言うことを感じる。だから、そこからパワーアップするのは大変なこと、親の会の運営といったことは本当に頭が下がる。ところで、親の会のような団体には、往々にして主義主張が入り込むことがある。主義主張は必要であり、みんなを束ねたり、長期的な視野に立った活動を行うには欠けてはならないものである。しかし、往々にして現実の対応への足かせになるということは否めない。また、主義主張は構成員のごく一部の人や、周りの人が作り上げて、一人歩きしてしまう場合もある。周りの人は、当事者とともに生きていく人もいるが、主義主張を満たすために当事者とききあっている人、あるいは最初は当事者とともに生きていたが、年月がたつにつ

れてはからずもそのように変化してしまった人がいるのも否めない現実である。しよがいがい問題に限らず、このようなことはたくさん転がっている。そして多くは現実の問題解決の足かせになっている。主義主張と現実とのあり方はどうがいいのか、悩みはつきないものである。主義主張は相反しても、現実は一つである。

「大変ですね」と言われて傷つく場合もある

しよがいがいをもつお子さんの子育ては、客観的に見ると大変である。だからつい親に「大変ですね」「よくやっていますね」「偉いですね」と言ってしまうことがある。これは相対的な比較から出る感情であり、たいいていの人は、本当に感心しているのである。だから、素直な感情の吐露としてつい言ってしまうことであって、「自分はそのうではなかったからよかった」と思っていない。それはあとか



ら気づくことである。しかし、大変ですねとか偉いですねと言われた方は、そうはとれない場合がある。傷つく場合もある。決して周りからほめられること、「できた人」と評価されることを求めているからだろう。また、他人の意識、差別された意識を感じることもあるのである。

「大変ですね」「偉いですね」と評価してほしいとは思っていないことは、指摘されなければわからない。多くの人にすんなりと知ってもらいたければ、何もわからないで言ってしまう人に対して、

大きく傷つかないように、自分で「言っただよ」ということを発見してもらうため、上手な指摘というスタンスをとることが重要なだろう。多くの人間は、自分でわかれば一つ成長するけれど、責められれば逃げ、傷つけば忌み嫌うようになるからである。しかし、このようなことは、当事者が「やめてほしい」といわなければ前に進まないのも現実である。また、自分のことをわかってもらうのに、そこまで他人に気を遣うこともないだろう。ただ、どんな人（家庭でも、多かれ少なかれ何かトラブルを抱えていて、ある意味ではお互い様かもしれないということを知ること大事かもしれない。これはお互いに、遠慮しないで吐露しあうのが一番早いかもしれない。程度の差は大きく違っていても、お互い、何かわかりあえる部分があるだろう。

注意点として、このようなこと



は、何らかの主義主張と結びついた時点で、人間対人間のつきあいの範囲を超えて別のものとなる。主義主張となれば、やはり議論の対象になってゆくだろう。

理屈を教える教育、「わかりあう」と言っ教育

しょうがい関係のことで書いてきたのだが、読者の方はすぐエイズの活動と結びつけることができただろう。たぶん、わかりあうと言っことは、発見しあうと言っ、そういうものなのだ。エイズ教育

も、たとえば「このようなくことでは感染しません」とか、「感染者とともに共生する社会をつくりましょう」というのは理屈を教えている。でも、理屈はあとからついてくるものだろう。「わかりあう」と言っ教育をするにはどうしたらよいだろう。

理屈と感情を包含して考えるための「統合」

理屈と感情はやはり別物である。理屈と感情を包含して一つのものを考えるには、「統合」が必要なのだろう。そして、自然科学というのは「分化」には強いが「統合」には弱い。今、私にとっでは、哲学や宗教を勉強しなければならぬときが来ているのかもしれない。

JINNTA / 公衆衛生医師
e-mail: jinnta#kms.ac.jp
homepage: http://www3.

justnet.ne.jp/~jinnta/

全国から35団体が参加

'00年度ボランティア指導者研修会報告

新ヶ江 明遠

2001年3月24日～25日、1泊2日の日程で「厚生労働省委託エイズ予防財団主催 '00年度ボランティア指導者研修会」が東京で開催されました。NGO／NPOの協働と活動の可能性を目指して、全国35団体の人たちが会場に集まりました。

今年度は同研修会実行委員会が実施するという形を取り、研修会開催・運営のスキルをより多くの団体と共有するため、従来の参加者枠とは別にスタッフ・トレーニー（スタッフ研修参加者）枠が新たに設けられました。LAPからは代表の清水が実行委員として参加させていただきました。

○第一日目

今回、僕は初参加だった。都営大江戸線を乗り継いで、清澄白河駅で下車。深川井のお店を横目に、目的地のホテルB&Gに予定時間よりも早めに着いてしまった。「指導者研修会」って、ちよつと僕が行くには場違いなのではないかと思つて、前日からかなり緊張していた。春の訪れを感じる、ちよつと暑いぐらいの一日目だった。

●オリエンテーション

午前中の公開講座「HIV感染症の知識」の後、午後1時からオリエンテーションが始まった。それぞれが自己紹介をする。若い学生の人から、長年この業界で活動されている方まで、いろんな方が参加されていた。自分の同年代の人も結構いっぱいいて、ちよつと安心。

●組織のマネジメントについて

午後2時から午後6時まで、みちりと講義。「組織マネジメント」についての講座＆ワークショップだ。環境問題のNGOで活動されている川北秀人さんの話は、予備校時代の講義を思わせるエネルギーシチュなものだった。どのように自分たちの活動を運営していくのか、どのような目標を立てそれをどのように実行に移していくのか、予算をどのようにもらうてどのようにつかっていくのか、などなど、まさに経営のいろはを学べた。とても興味深い講義だった



会場となったホテルB&G（東京都江東区）

2000年度ボランティア指導者研修会タイムテーブル

第1日目 3月24日(土)

- 10:30-12:00 公開講座：2001年のNGO/NPO活動に必要なHIV感染症の知識(講師：都立駒込病院 今村顕史氏)※自由参加
- 13:00-13:45 オリエンテーション
- 14:00-15:30 講座1：組織のマネジメント(講師：人と組織と地球のための国際研究所(IIHOE) 川北秀人氏)
- 15:45-18:00 ワークショップ1：NGO/NPO活動のマネジメント(ファシリテーター：川北秀人氏)
- 19:00- 懇親会

第2日目 3月25日(日)

- 9:00- 9:50 ワークショップ2(前半)：NGO/NPOのHIV/STD予防啓発活動の展望(ファシリテーター：井上洋士氏)
- 10:00-12:00 講座2：当事者参加型リサーチの実際～NGO/NPOと調査研究との関わり合いを探る～(講師：はばたき福祉事業団 瀬戸信一郎氏)
- 13:00-15:00 ワークショップ2(後半)：NGO/NPOのHIV/STD予防啓発活動の展望(ファシリテーター：井上洋士氏 リソースパーソン：佐藤未光氏)
- 15:15-16:00 まとめ、閉会

※スタッフトレーニーの方は23日から研修会の準備等を行いました

が、前の晩レポートに追われてあまり眠れなかった僕には、かなり過酷だった(笑)。

●懇親会

この「指導者研修会」の主旨は、午後7時からの懇親会。最初はレ

ストランでの食事だったが、そのあと場所を会議室、しまいには個室へと移し、自分たちの活動のこ

いろんな話を夜遅くまで行なった。

僕にとつてはこの懇親会がまさに貴重な時間で、学校の先生、保

健婦さん、大学関係者、そして感染者の方々と、交友を深めることができた。

今回知り合った方々とは、その後いろんなところで顔を合わし、

いろんな協力関係が築けていると思う。

○第二日目

●予防啓発活動の展望(前)

二日目、前日の酒を引きずりな



公開講座の資料とムービーはホームページで公開されている
http://homepage.mac.com/aldngov/

がら、講義の直前に朝食を流し込み、午前9時から始まるワークショップへ。

午前9時から午前10時までのワークショップでは、自分たちがど

のような予防啓発活動を行っているのかを単語帳の小さな紙に書いて提出した。これは午後7時のセッションで使うものの下準備となる。

●当事者参加型リサーチの実際

午前10時から正午までは、はば

たき福祉事業団の瀬戸信一郎さんによる講義。HIV感染者の当事者と研究者が、どのように共同研究を行ってきたのかということ、丁寧に説明された。(山崎喜比古・瀬戸信一郎編『HIV感染者の生存・生活・人生―当事者参加型リサーチから―』有信堂 2000)

●昼食

お昼は、前日の懇親会ですっかり仲良くなったみんなと、ゆっく

東京都エイズ相談連絡会

「HIV感染不安者への対応について」

7月23日、「感染の確率や検査方法等にこだわるケースへの対応」をテーマに都庁で東京都エイズ相談連絡会が開催された。相談員自身が「100%の確実性」に振り回されるのではなく、細かい数字や確率にこだわるのがその人にとってどのような意味を持っているのかを考えた対応が望まれるのではないだろうか。

2001年7月23日、都庁第一庁舎にて東京都エイズ相談連絡会が開催されました。
「HIV感染不安者への対応についてPART2」感染の確率や検査方法等にこだわるケースへの対応」と題されたこの講習会。参加者は東京都内でHIVやエイズの電話相談やサポート活動をされている方々が来ていました。講師の都立衛生研究所微生物部の関

- ・ 現実な結果を得られる時期は？
 - ・ 6ヶ月後検査の根拠は？
 - ・ 偽陽性、偽陰性について
 - ・ PCR検査法について
 - ・ ウインドウピリオドについて
 - 等々、様々なものがありません。
- 講習会の中で日頃、電話相談員

根大正氏がHIVというウイルスについて、抗体検査の仕組みといったことについて解説されました。
私が読み違えた部分もあったのですが、テーマから想像するに、感染不安者に対してどのような対応が行われるのが望ましいのかというものを期待していたのですが、相談員が答えに困ってしまう相談者からの質問について関根氏より詳しく解説してもらい、HIV講座のふりかえりという感じがしました。

関根氏の説明はそんな相談員の方々の疑問にとても詳しく丁寧に答えてくれていて印象を持ち、私自身も再確認出来た部分が多々ありました。
質問内容を抜粋すると、



をされている方が、感染不安の人たちの声を代弁するかのよう。「じゃあ二ヶ月じゃダメなんですか？」「三ヶ月待てば100%なんですか？」など、講師の方にこそぞとばかりに「相談」を持ちかけている風景も見られました。
そのような光景が繰り広げられたことに驚かされたと同時に、電話相談員の置かれている厳しい状況もかいま見ることができました。電話相談員にもパターンがあり、情報の伝達、指導に徹することを目指している相談員と、相談者の発する言葉から「どうしてそのような不安に駆り立てられているのか」に焦点を当てようとする相談員がいるように思いました。

どちらの相談員が相談者ニーズに添えるのかはケースバイケースだと思えますが、相談者側で選べる、または、相談員側の広範囲な対応に必要なプロトコルの開発が必要なのではないかと思えます。
相談者の一つ一つの質問に丁寧に答えることも必要でしょうが、「100%の答え」や「100%の結果」はないという認識を持つた上で対応することも必要なのではないでしょうか。相談員の対応によっては感染不安者の不安を増幅させることもありえると思うのです。
最後になりますが、エイズ予防財団で相談員をされている方が、そこまで細かい数字にこだわる人には科学的根拠となる数字を説明するよりも、細かい数字や確率にこだわる人がその人にとってどのような意味を持っているのかを考えて対応した方がいいのではないかと言っていたのが印象的でした。

「ふじもと」



草田コラム

感染を知らない自由 の尊重が必要だ

草田 央

日本のエイズをめぐる状況は、医療にしる福祉にしる、最悪期を脱したと言える。それゆえ問題の所在が、ケースバイケース、個々人の抱える様々な問題に対処するという分散傾向にある。これはすなわち、マスキャンペーンなどが通じない、素人がうかつに手出しできない状況へと進んできたことを意味する。

それに抵抗するかのように、再び検査キャンペーンが盛んになってきたような気がする。「HIV抗体検査を受けましょう」という誰もが信じて疑うことのない“絶対正義”のキャッチフレーズさえ唱えていれば、かかわりたくない個々の微妙な問題を無視して、エイズを論じることができるからだ。しかし、これは再び危険な兆候だと危惧している。

「感染者のため」という錦の御旗

たしかにHIV抗体検査法は、きわめて優れた検査である。感度や特異性が高く、偽陰性や偽陽性が少ないからだ。医療体制が整い、抗HIV療法の有効性も確立してきた現在、早期発見による早期治療は、確実に延命につながると言えるだろう。

かつて医療体制や福祉制度を整えないままに、いわば感染者を社会から追放するためだけの検査キャンペーンとは状況が異なってきたわけだ。それゆえ「感染者のため」という錦の御旗が掲げられるのが最近の傾向だが、その本音は社会防衛に根ざした検査至上主義を復活させつつあると言ったら言い過ぎだろうか。

健康診断が悪い生活習慣の維持につながる

ガン検診に代表されるように、

かつて早期発見・早期治療が叫ばれ、健康診断や人間ドックなどもはやされた。しかし近年、その有効性に大いに疑問が呈せられているのが事実だ。

例えば肺ガン検診。レントゲン撮影では肺ガンの早期発見につながらない（レントゲンには写りにくいため）という事実が一つ。被曝させることによって、かえってガンを誘発させているのではないかという危惧が二つ目である。それに加え、本来、健康診断を一つのきっかけにして、生活習慣を変えてもらおうというのが目的であったはずであったが、健康診断が悪い生活習慣の維持継続につながっていることが明らかになってきたことが大きい。

健康診断の結果は「たまたま悪いところが見つからなかった」という意味以上のものではない。にもかかわらず「喫煙や暴飲暴食など悪い習慣を止め、バランスのとれた食生活や適度な運動を心が

けましょう」というメッセージが伝わらず、あたかも健康のお墨付きを与えられたかのような錯覚に陥いらせてしまっているのだ。

年に一回の健康診断が、あたかも健康維持のための手段になり、「検査を受けたから大丈夫」などという悪しき生活習慣維持への妙な自信を与える結果になってしまうというわけだ。

検査を真に感染予防につなげるには…

HIV抗体検査についても同じことが言える。風俗店に見られるように、定期的に検査を行なっていることを前面に出して、コンドームなしの過激なサービスを売りにしているのは、本末転倒であることとは明らかだろう。HIVの蔓延防止に有効なのはセーフアセットクスであり、検査それ自体に感染予防効果はないのである。

しかも優れた検査法とされるHIV抗体検査にしても、当然万能

ではない。

ご存知のようにウィンドウ・ピリオド（検出不可能期間）があるからだ。ソープの帰りに必ず献血に寄り、今日の安全の確認をして、またソープに行く…なんて人がいるようだが、これなど全くナンセンスな行為であることは言うまでもない。

検査を真に感染予防につなげるには、検査前と検査後のカウンセリングを徹底して行ない、セーフアセットクス等の実践という生活習慣の変更を迫るものでなければならぬ。

逆に言えば、その場で検査を受けるか受けないかはさして重要ではない。むしろ、検査を受ける必要のない「エイズ・ノイローゼ」のような人々たちには、積極的に「あなたは検査を受けるべきではない」とのメッセージを伝えなければならぬだろう。

ところが、日本のエイズ対策は永らく、電話相談等に見られるよ

うに、本来エイズとは無関係のエイズ・ノイローゼの人たちに「何でもいいから検査を受けなさい」と言い続けてきた『素人以下』の活動であった。さすがに二十一世紀になって、まともな検査キャンペーンも散見されるようになってきたが、やはり慎重にことを運ばなければ、悪夢を再現させる結果となる。

不当解雇訴訟で争われた無断検査の是非

平成七年三月三〇日東京地裁判決のHIV感染者不当解雇訴訟でも、無断検査の是非が争われた。被告は裁判で、一貫して「原告のための検査」であったことを主張していた。

原告は現在も生きている。会社による強制帰国やその後の抗HIV療法によつて、延命できているのは紛れもない事実だろう。もし会社の無断検査がなければ、今ごろ勤務先の東南アジアのどこかで

亡くなってしまっていたかもしれない。

しかし、それでも彼は無断検査を非難する。それにより彼の人生が大きく変わってしまったからだ。「太く短い人生のほうが良かったかもしれない」と彼は今でも言う。充実した生活を送っていた昨日までの自分が、HIV抗体検査によつて解雇され、副作用に苦しみながら細々と生きている生活になってしまったからだ。

もちろん彼が生きつづけている意味は、周りの人間にとつても会社にとつても彼自身にとつても大きな意義がある。しかしそれは彼が自主的に選択した結果ではないのだ。

「検査は本人の自発的意思によつて行なわれなければならない」との大原則をもう一度、想起しなければならぬ。無断検査は論外としても、検査の強制や誘導も禁じられている、と考えなければならぬ。

問1. SEXする

YES NO

問2. 性病が気になる

YES NO

問3. 旅行はパックよりフリープラン

YES NO

そんなあなたにPCM

プリベンション・ケースマネジメント(PCM)はHIV感染・再感染のリスクを減らしていく為の支援をあなたに合わせて提供します。「ああしなさい、こうしなさい」とは決して言いません。あなたにとって一番いい方法を、あなたのペースで、一緒に話し合いながら見つけていきましょう。

.....
モニター募集中

※PCMサービス提供は、社会福祉・医療事業団（高齢者・障害者福祉基金）の助成を受け、LAPがカリフォルニア大学サンフランシスコ校エイズ予防研究センターの協力を得て、管理運営しています。詳細は <http://www.lap.jp/> をご覧ください。

警視庁のHIV感染者解雇は本人のため？

平成二二年六月一五日には警視庁を解雇されたとして訴えが起こ

された。この裁判でも無断検査が問題となっている。被告東京都労働省の高齢・障害者対策部が平成一〇年に行なった「HIV感染者に係る雇用問題に関する研究

会」報告を根拠に、HIV感染者の健康管理として(一) ストレスを避けること(二) 定期的な通院時間の確保(三) 服薬が可能な勤務形態(四) 急な入院に対応可能な業務調整(五) 体調に合わせて休養ができる弾力的な対応の必要性を挙げている。もちろん労働省の報告書は、感染者のための企業の努力目標として作成されたと思われる。

しかし、それを達成できないからと解雇事由に利用されてしまったわけだ。つまり「あなたのために無断検査をし、あなたのために解雇したのですよ」と言わんばかりである。(被告東京都は、包括的同意が得られていたとして『無断』検査を認めていないし、本人の希望であつて解雇ではないと争っている)。

現在「HIV抗体検査を受けましょう」と早期発見・早期自覚を呼びかけている人は、こうした様々な解雇事件での(あなたのた

め) 無断検査を、果たして是とするのだろうか?

強制告知が許される道理はあるのだろうか

日本赤十字社が献血で発見したHIV感染者に(たとえ本人が告知を希望しなくても)告知していることは、今や公然の秘密である。日赤は、これを「人道的措置」と正当化して抗弁している。

昔、献血をきっかけに日赤に呼

草田央ホームページ “AIDS SCANDAL”

■URL

<http://www.t3.rim.or.jp/~aids/>



び出され、HIV感染生告知を受けた人の話を聞いたことがある。「何で献血なんかしたんだ」と恫喝され、「もう二度と献血するな」というものだったという。ただただ一方的なもので、カウンセリングなども皆無だったらしい。さすがに今は日赤も、それなりのフォローはしていると思う。カウンセリング体制も整えているだろう。しかし告知を続ける日赤の本音は、何も変わっていないと思う。既に抗体陽性になっている献血者を、かたくなに排除しようとするのはなぜだろうか。一つは、コスト増が考えられる。日赤では献血された血液の一部を多人数分ブールして、検査の一括処理を行なっている。このブールが陽性となつて初めて、陽性血を特定するための細分化した検査が『追加的に』行なわれるシステムになっているようだ。いったん陽性と判断されればデータベースに登録され最初から破棄されるようになるのかも

しれないが、採血や破棄のための費用がかさむことは事実であろう。もう一つは、緊急輸血など、陽性血が検査をすり抜けて輸血されてしまう危険性だ。もしそのような感染事例が生じた場合、PL法(製造物責任法)の対象として、日赤に多額の損害賠償請求がなされる可能性がある。

いずれも日赤の保身がその理由と考えられ、決して人道的措置などではないと私は思うのだ。輸血を受ける患者の安全性のために無断でHIV検査をするのは当然だとしても、献血者に対する強制告知が許される道理があるうはずがない。

自分の感染を知らない 自由の尊重

平成七年に労働省が作成した「職場におけるエイズ問題に関するガイドライン」では、「事業者は労働者に対してHIV検査を行わないこと」と明言されている。

同年の前述解雇事件の判決文でも、「HIV感染者にHIVに感染していることを告知するに相応しいのは、その者の治療に携わった医療者に限られるべき」として「早期発見・早期治療よりも感染者のプライバシー保護が重視されるべきだと言えよう。そしてこのことは、医療や福祉体制が進んでも、いや進めば進むほど、むしろ多様な価値観が容認されるべきだということだ。

つまり、何も早期発見・早期治療が必ず本人のためになるとは言えないという事実だ。自分の感染を知らない自由も、その結果としてエイズで死んでしまう自由も尊重されなければならない。そして、そうした多様な価値観を認めず「HIV抗体検査を受けましょう」などという価値観の押し付けは、決して「感染者のため」などというものではなく、必然的に社会防衛的色彩を帯びるということを自

覚しなければならぬ。何も一概に社会防衛論がいけないとは私は考えないが、そこに「感染者のため」などというとつてつけた理由を掲げることは大いなる矛盾であるし、欺瞞であり偽善でしか過ぎない。

検査を受けたいと思うときに受けられる環境

必要なのは、検査を受けるべき人が受けたいと思うときに受けられる体制整備である。決して検査を受けるべきでもない人や必ずしも検査を受けたいと考えているわけでもない人に検査を勧めたりすることではない。

その意味で、HIV検査法・検査体制研究班が作成した「HIV検査・相談マップ」は、[※]未だ首都圏のみの情報であり、あまりにも遅きに失したとはいえ、その第一歩として評価できるだろう。

[草田 央] aids@t3.rim.or.jp

<http://www.t3.rim.or.jp/~aids/>

※2001年10月現在。今後は愛知、大阪などの情報も掲載予定とのこと。



HIV検査・相談マップ
<http://www.hivkensa.com/>



地図検索のページ。沿線、時間帯検索、都心部拡大表示等が可能

社会福祉・医療事業団（高齢者・障害者福祉基金）助成事業

LAPニュースレター無料送付中!

残部僅少

LAPニュースレター19号～22号は社会福祉・医療事業団（高齢者・障害者福祉基金）の助成事業のため希望者には無料で送付しています。ご希望の号数と部数、送付先をLAPまでお知らせ下さい。なお、18号、27号、29号は品切れとなりました。

〒100-8691 東京中央郵便局私書箱490号 LAP TEL03-5685-9716 FAX03-5685-9703

HIV・エイズ関連ニュース

(2001年3月8日～2001年9月8日)

○HIV、感染初期の血中量に男女差－米国のグループ発表

3月8日・毎日新聞

エイズウイルス（HIV）感染初期の血中ウイルス量に男女差があることを米ジョンズホプキンス大などの研究グループが突き止め、8日発行の米医学誌「ニューイングランド・ジャーナル・オブ・メディスン」に発表した。女性の平均ウイルス量は男性に比べて約5分の1しかなかった。同グループは「原因を解明し、治療に生かしたい」と話している。

○薬害HIV感染者、死者数増加 C型肝炎が悪化、多重感染深刻に

3月14日・毎日新聞

2000年の薬害によるHIV（エイズウイルス）感染被害者の死者数は16人となり、1995年に過去最悪の64人を記録して以来、5年ぶりに増加に転じたことが、東京、大阪のHIV訴訟原告団の調査で分かった。16人のうち、ほぼ半数はC型肝炎の悪化が原因とみられている。両原告団側は13日の坂口厚生労働相との定期協議で、非加熱血液製剤の投与によるHIVとHCV（C型肝炎ウイルス）の「多重感染」の深刻な実態を示し、現在も心身両面で苦しむ遺族への支援を求めた。坂口厚生労働相は、遺族の実態把握に協力し、支援も前向きに検討することを約束した。

両原告団によると、血友病患者で非加熱製剤を投与された感染被害者のうち、死者は2000年までに505人に上る。

○米大手製薬会社、アフリカ向けに赤字でエイズ薬

3月16日・読売新聞

米大手製薬会社プリストル・マイヤーズ・スクイブ社は十四日、エイズ禍が最も深刻になっているアフリカ諸国向けに、エイズの進行を遅らせる治療薬をコスト割れの価格で販売すると発表した。別の米大手製薬会社メルクが先に、途上国向けのエイズ薬を米国での販売価格の約十分の一まで引き下げると発表したのに続く動きで、高価な治療薬を買えない途上国の患者が次々に死亡する中、製薬会社が膨大な利益を得ているとの国際的な批判に突き動かされた格好だ。

○HIV感染者へ差別ダメ84% でも一緒に働くのはイヤ45%も／内閣府調査

3月25日・読売新聞

エイズウイルス（HIV）感染者への偏見・差別を「あってはならない」とする人が八割を超える一方で、半数近くが「一緒に働くのは好ましくない」と考えていることが、内閣府が二十四日発表した「エイズに関する世論調査」で明らかになった。感染者に対する建前と本音が浮き彫りとなった。調査は昨年十二月、全国十五歳以上の五千人を対象に行った。回収率は69.7%。八七、九一、九五年に続き四回目だが、初めて十代を調査対象に加えた。

感染者への社会的偏見や差別について、「あってはならない」とする人は84.1%にのぼった。二十歳以上で見ても同じ割合で、前回調査より1.6ポイント増加した。身近な人が感染した場合の付き合い方も、59.5%が「従来と同様」と回答し、「減らす」の24.3%、「やめる」の5.6%を大きく上回った。ただ、職場で一緒に働くのは、「好ましくない」(45.3%)とする人が「好ましい」(39.6%)を上回った。好ましくない理由（複数回答）は、「気遣いが必要になる」が65.9%で最も多く、「職場環境に影響が出る」(36.2%)、「感染の可能性がある」(34.2%)が続いた。

○薬害エイズ、過失認めず 安部元副学長に無罪判決 予見可能性低い／東京地裁

3月28日・読売新聞

血友病治療などに使われる非加熱血液製剤にエイズウイルス（HIV）が混入し、患者が感染して死亡した薬害エイズ事件で、業務上過失致死罪に問われた元帝京大副学長・安部英（たけし）被告（84）の判決公判が二十八日午前、東京地裁で開かれた。禁固三年の求刑に対し、永井敏雄裁判長は「安部被告には血友病患者がエイズを発症して死亡するという予見可能性はあったが、その程度は低く、過失があったとは言えない」と述べ、無罪を言い渡した。薬害史上、医師の刑事責任が初めて問われたが、判決は当時の医療現場では、安全とされたクリオ製剤への転換は治療上、支障があったと判断した。この事件では、大阪地裁が昨年二月、製薬会社の旧ミドリ十字元社長ら三被告に実刑（禁固）を言い渡しており、正反対の結論となった。検察側は控訴する方針。

《判決の骨子》

- 一、被告には、エイズによる血友病患者の死亡という結果発生の予見可能性はあったが、その程度は低かった。
- 二、大多数の専門医が非加熱製剤を投与していた実情に照らせば、被告に、非加熱製剤の投与を中止しなかった結果回避義務違反があったとは評価できない。
- 三、結果が悲惨で重大であるからといって、犯罪の成立範囲を広げることはできない。

○エイズ患者の日和見感染症治療薬「バルサイト」を承認／米食品医薬品局 3月31日・読売新聞

米食品医薬品局（FDA）は、エイズ患者の日和見感染症治療薬「バルサイト」を承認した。三十日、欧州に本拠を置く多国籍製薬企業「ホフマン・ラ・ロシュ」が発表した。今年秋から使用可能になる見通しという。この薬は、エイズ患者が発症する日和見感染症のうち、サイトメガロウイルスを治療する経口薬。

○薬害エイズ事件、東京地検が控訴 安部被告の無罪「予見可能性、低く判断」 4月11日・読売新聞

薬害エイズ事件で、業務上過失致死罪に問われ、東京地裁で無罪判決を受けた元帝京大副学長・安部英（たけし）被告（84）について、東京地検は十日、判決を不服として東京高裁に控訴した。

○エイズ薬複製使用「特許権侵害」の訴え、製薬会社を取り下げ／南アフリカ 4月20日・読売新聞

エイズの進行を遅らせる治療薬を並行輸入したり、特許料を払わずに複製した薬を輸入、使用できるよう薬事法を改正した南アフリカ政府に対し、英グラクソ・スミス・クラインなど大手製薬会社三十九社が「特許権の侵害」として法改正の無効を訴えていた問題で、原告側は十九日、首都プレトリアの高等裁判所で開かれた審理の席上、訴えを全面的に取り下げた。「訴訟を続ければ、会社の国際的イメージを損ねるため」としている。これにより世界最多の約四百万人のHIV（エイズウイルス）感染者を抱える南アは、安価な治療薬を感染者に正式に投与できることになった。

○入境時のエイズ検査批判「人権侵害」と改善求める 4月30日・共同通信

外国からの移民申請や長期滞在に当たり、エイズウイルス（HIV）に感染しているかどうかの検査を義務付けている国・地域が六十以上あることが二十九日までに、国連エイズ合同計画（UNAIDS）の調査で分かった。アフリカでは「同性愛者はエイズの感染源」として処罰対象としている国もあった。UNAIDSは、こうした政策はいずれも「HIV感染者に対する偏見を助長しており、人権侵害に当たる」（法律担当者）と批判、改善を求めている。

UNAIDSによると、入境時のHIV検査を義務付けているのはオーストラリアやエジプト、ハンガリーなど。いずれも自国・地域内でのエイズ感染者増加を防ぐための措置とみられるが、UNAIDSは「エイズだけに特定して検査することは、雇用や日常生活面で有形無形の差別につながる」（同）と問題視している。

○「傷つくと思わなかった」 保育園が両親の訴え認める 5月8日・共同通信

高松市内の保育園で、女性保育士に血友病の息子（8つ）の病名を明かされ、名誉やプライバシーが侵害されたなどとして、同市内の両親らが保育園を運営する社会福祉法人などに総額百五十万円の損害賠償を求めた訴訟の第一回口頭弁論が八日、高松地裁（溝淵勝裁判長）であり、被告側は「傷つくとは思っていなかったが、発言をしたのは事実」と、原告側の訴えを認めた。次回から和解交渉に入る。

訴状によると、入園前に両親は「病気のことは秘密にしてほしい」と保育園に要請したが、一九九八年四月の入園式当日、女性保育士は男児を「血友病のため一年間、（別の）保育園に通えませんでした」と他の園児や保護者に紹介。さらに一九九年三月には、『「あいつの近くには寄るな！エイズがうつるぞ！」と言われてきた親子です』と記載した卒園記念のプリントを園児に配布したという。両親は「病気という私的な情報を安易に不特定多数に漏らすのは違法」などと主張していた。

○エイズ対策強化で決議 WHO総会、感染予防など

5月21日・共同通信

ジュネーブで開かれている世界保健機関（WHO）総会は21日、アフリカを中心に深刻化しているエイズの感染予防やワクチンの開発、安価な治療薬の調達などを求めた二つの決議案を採択した。

治療薬に関しては当初、ブラジルが安価なコピー薬を製造する権利などを明記するよう強硬に要求したが、世界貿易機関（WTO）の貿易関連知的財産権（TRIPS）協定に合致しない恐れがあるとして先進国が反発。最終的には「国際協定の範囲内で効果的な措置を取る」との表現にとどまった。決議は、アフリカの一部で成人のHIV感染率が20%を超えるエイズの現状を「社会開発に脅威を与え、かつてない規模の危機」と規定。WHO加盟191カ国に対し、教育などを通じて若者の感染予防や治療態勢の強化を求めた。

○首相、控訴を断念＝「深く反省」と政府声明－ハンセン病訴訟

5月23日・時事通信

ハンセン病国家賠償訴訟で国が全面敗訴した熊本地裁判決を受け、政府は23日夕、控訴断念を決めた。関係閣僚、与党3党幹事長と協議した上、小泉純一郎首相が決断した。これを受け、福田康夫官房長官は「施設入所政策が多くの患者の人権に対する大きな制限となったことを深く反省する」とする政府声明を発表。患者・元患者全体を対象にした損失補償を行い、協議の場を設置するなどハンセン病問題の全面解決に向けた対策を進める方針を示した。

これにより、同訴訟の判決は1審で確定する。政府は東京、岡山両地裁で係争中のハンセン病訴訟についても、原告側と和解交渉に入るとみられる。小泉首相は控訴断念の理由について、「問題の早期かつ全面的な解決を図るためだ。判決を重く受け止め、極めて異例だが控訴しないことにした」と述べた。

○国際社会、ようやく本腰 エイズ初報告から20年

6月5日・共同通信

世界初のエイズ症例が米国で報告されてから5日であらう20年。エイズウイルス（HIV）感染者は世界で計約5,800万人に達し、うち約2,200万人が死亡するという「危機的な事態」（アナン国連事務総長）にまで発展した。

国連エイズ合同計画（UNAIDS）によると、HIV感染者は現在、世界で約3,610万人。うち70.1%に当たる約2,530万人がサハラ砂漠以南のアフリカに集中している。国によっては、成人の感染率が3割を超える。中国やインドなど人口大国での感染者増も懸念要因となっている。

○国連エイズ総会に森前首相を派遣－家西氏が批判「差別発言した人が…」

6月20日・毎日新聞

元大阪HIV薬害訴訟原告団代表で民主党の家西悟衆院議員は19日の代議士会で、政府が国連エイズ特別総会の政府代表に森喜朗前首相派遣を決めたことについて「非常におかしな話だ。エイズに差別発言をした人が、（エイズ）まん延の防止とかのスピーチをする。世界に恥をさらす」と批判した。家西氏は同党の血液薬害対策ワーキングチーム座長も務め、国連エイズ特別総会への出席を外務省に打診したが「枠がない」と断られたという。森氏は自民党幹事長時代の昨年1月の講演で、衆院選初出馬のころを振り返り、「あいさつに行くとな農作業をしている農家のみなさんが、家の中に全部入っちゃうんです。なんかエイズが来たように思われて」と述べ、「エイズ患者をべっ視している」と批判された。

○対エイズ枠組み採択 基金設立、年内目指す－国連特別総会が閉幕

6月28日・毎日新聞

地球規模でエイズ対策を考える初の国連エイズ特別総会は27日、「世界エイズ・保健基金」の設立支持を盛り込んだ政治宣言を採択、エイズの感染予防・治療に向けた大きな枠組みを作って閉幕した。7月のジェノバ・サミット（主要国首脳会議）で引き続き協議し、基金の年内設立を目指す。

各国は政治宣言の採択を受け、03年までにエイズと闘うための国家戦略・目標を策定することになった。エイズ対策に年間70億～100億ドルが必要との認識で一致、今後も国連が中心になり、各国政府や民間企業に支援を要請していく。

○日米首脳会談 小泉首相、エイズ基金に「2億ドル拠出」表明

7月1日・読売新聞

小泉首相は三十日の日米首脳会談で、コフィ・アナン国連事務総長が提唱している「世界エイズ保健基金」（仮称）に対し、日本政府は二億ドルを拠出する考えを明らかにした。

○夫婦間の「感染」で賠償命令／南アフリカ

7月18日・読売新聞

南アフリカで、エイズ感染者の夫に故意にウイルスをうつされたとして、同国東部・ダーバンに住む妻が損害賠償を求めた裁判で、プレトリア高裁はこのほど、夫に対し、肉体的・精神的苦痛に対する賠償と治療費として約96万ランド（約1500万円）の支払いを命じた。英サンデー・タイムズ紙によると、妻は1995年、休暇で訪れたモザンビークでビジネスマンの夫と知り合い、3年後に結婚した。夫は複数の女性と交渉を持ち、すでにエイズに感染していたが妻には隠していた。同国のエイズ感染者は世界最多の470万人に上るが、夫婦間のエイズ訴訟で賠償が認められたのは初めて。

○血液供給は「国に責務」 基本法制定の方針 厚労省

7月28日・朝日新聞

輸入血液製剤で血友病患者らがエイズウイルス（HIV）に感染した薬害エイズを教訓に、血液行政のあり方を検討していた厚生労働省は、血液の供給体制について「国の責務」を明記する基本法を制定する方針を固めた。来年の通常国会への法案提出を目指し、患者側や日本赤十字社（日赤）との本格調整に入った。国が年次計画を定めて献血を促進し、国内血液での100%自給をめざす内容。薬事法も改正して血液製剤などの安全対策を強化する方針だ。

○カナダ政府が大麻を合法化 末期患者の苦痛緩和に

7月31日・朝日新聞

カナダ政府は30日、末期患者が大麻を栽培したり吸ったりすることを合法化する新法を施行した。政府公認の大麻農場も始まっており、世界でも例のない治療用大麻の容認に踏み出した。大麻使用が認められたのは、がんやエイズ、関節炎などで余命1年未満と診断された人たち。医師の診断書があれば、苦痛を和らげるために吸引することのほか、自宅で栽培するのも家族に栽培してもらっても合法とされた。患者は1回につき、最高30日分の大麻を購入できる。カナダ保健省は昨年12月、マニトバ州の栽培会社と契約を結び、供給量を確保するための公的な大麻農場も開設した。

大麻容認では、個人使用を罰しないオランダが有名だが、医療用に大麻を解禁したのは、国としてはカナダが世界で初めて。日本や米国では、医療目的であっても大麻使用は違法とされている。

○エイズ動向「患者の増加が目立つ」 厚生労働省の委員会

7月31日・毎日新聞

厚生労働省のエイズ動向委員会（吉倉廣・国立感染症研究所長）は31日、3月26日から6月24日までの約3カ月間で、感染症法に基づき新たにエイズ患者数92件、HIV（エイズウイルス）感染者数144件の報告があったと発表した。患者は29件、感染者は15件、いずれも前回に比べて増え、特に患者数の増加が目立った。

同委員会によると、感染経路別では、エイズ患者は異性間の性的接触が37件、HIV感染者は同性間の性的接触が80件で、それぞれ前回に引き続き最多だった。また、今年上半期の保健所でのHIV抗体検査の件数は2万9737件に上った一方、保健所での相談件数も6万1742件で、いずれも98年下半年以来の高い数字を示した。

○コンドームの使用奨励に反対声明 カトリック司教会

7月31日・朝日新聞

南アフリカ、ボツワナ、スワジランドのカトリック司教会は30日、エイズのまん延を防止するためのコンドーム使用奨励に反対すると声明した。南アのプレトリアで開かれた会議で、地元の司教が使用禁止を緩和するよう提案していた。

現地からの報道によると、司教会はコンドームが「不道徳で、エイズ対策には間違った武器だ」と断定。コンドームの奨励は性行為への自制心喪失につながるなど、かえってエイズまん延の一因になると糾弾した。コンドーム使用が許される例外として、夫婦の一方がエイズウイルスに感染している場合を挙げた。

サハラ以南のアフリカでは2500万人以上の感染者がいるとされる。ケニアでは、エイズ対策として政府がコンドームの大量輸入を計画したが、地元の宗教界が反対している。

○看護婦や医師の「針刺し事故」千葉県内で923件

8月4日・毎日新聞

看護婦や医師が、患者に使った針などを自分の体に誤って刺してしまう「針刺し事故」が、千葉県内だけで過去に923件発生していたことが、千葉大第2外科の落合武徳教授と鈴木孝雄助教授の調査で分かった。落合教授は「予想を上回る結果に驚いている。早急な対応が必要だ」と警告している。

針刺し事故について全国や県レベルでの大規模調査例が他にないため、落合教授らは、今年5月、同県内299病院に調査用紙を送付し、87病院から回答を得た。時期を特定せずに質問したところ、過去に923件の針刺し事故が起きていた。このうち看護婦や准看護婦など看護職員の事故が658件と7割強を占めた。

また、事故が起きた時、患者がC型肝炎だった例が275件（30%）、エイズだった例が5件（0.5%）あることも判明。この調査では、事故で感染したかどうかは尋ねておらず、実際の感染件数は不明だが、医療従事者が感染の危険にさらされている実態がはっきりした。どんな時に針を刺したかについては、患者に使った注射器の針にキャップを差し込む（リキャップ）時が約30%と最も多かった。落合教授らは、事故防止のため、安全のための操作手順の順守や改善▽入員や勤務体系を含めた職場環境の整備▽安全装置付きの器材の導入——などの対策を提唱している。

○AIDS文化フォーラム エイズへの理解深めようー横浜

8月5日・毎日新聞（神奈川版）

エイズへの理解を深める「2001 AIDS文化フォーラムin横浜」が5日まで、横浜市神奈川区のかながわ県民センターで開かれている。今年で8回目。エイズに関する支援活動を行う民間の35団体が全国から集い、さまざまなイベントを通し医学的、社会的視点からエイズを考える。

フォーラム2日目の4日は「バリア」をテーマに、パラリンピック金メダリストの成田真由美さんとHIV感染者の桜屋伝衛門さんが対談。周囲の目や内面の葛藤を乗り越え、いかに自分と向かい合ったかを話した。また、正しい性知識や学校での性教育を視野にいれたイベントも多数開かれた。写真展やパネル展示もある。参加無料。

○米のエイズ対策に陰り 死者、患者数減少止まる

8月14日・共同通信

米疾病対策センター（CDC）は13日、1990年代半ばに見られた米国のエイズによる死者数や新たにエイズと診断された患者の数の減少傾向が止まったとの調査結果を発表した。

CDCによると、昨年1年間の各四半期ごとのエイズによる死者の数は約4千人、新たにエイズと診断された患者数は約1万人で、この数は1998年7月以来、ほとんど変わっていなかった。各四半期でみると米国では、新たにエイズと診断される人の数は93年の約2万人、死者数は95年ごろの約1万2千人をピークに98年までに急激に減少していた。

エイズ感染の有無の検査や十分な医療を受けられずにいる人が多いことに加え、エイズの薬の副作用が目立ち始めたことや薬への耐性を持ったウイルスが増える傾向にあることが原因とみられる。

○HIV除去し体外受精成功 新潟大学

8月15日・読売新聞

新潟大医学部はエイズウイルス（HIV）感染者の夫の精液からウイルスを取り除き、妻の卵子と受精させる体外受精に2組の夫婦で成功し、14日、厚生労働省などに報告した。妻と胎児はともに感染していないと判定され、順調にいけば今秋と来春に誕生する。HIV除去の精液による体外受精の成功が明らかになったのは国内で初めて。荻窪病院（東京都）と慶大医学部などが共同開発したウイルス除去方法を用いた。米国では妻が感染する事故が起き、HIVを除去した人工授精の中止が警告されており、安全性を高めた体外受精の成功は、国際的にも注目を集めそうだ。

同省への報告書などによると、成功したのは30代同士の夫婦と、夫が30代で妻が40代の2組の夫婦。このうち1組の夫は、血友病の治療で使った血液製剤でHIVに感染した。

薬害エイズの被害者の中には、自然妊娠は妻にHIVを感染させる恐れがあるため、子供を作断念する感染者も少なくない。赤ちゃんを望む妻が感染したケースも出ている。

120人以上の被害者の治療をした荻窪病院血液科部長の花房秀次医師が、慶大医学部微生物教室などとともに、HIVを除去する最新の方法を共同開発。昨春、厚生省（当時）を通じて不妊治療で有名な新潟大医学部産婦人科の田中憲一

教授に相談をもちかけ、厚生労働省エイズ研究班の事業として実施された。費用の一部は国が負担した。

開発された方法は、血液のリンパ球除去などのために使われる「パーコール法」と呼ばれる方法に特殊な改良を加えたもので、精液を遠心分離機にかけ、比重の違いによって、正常な精子とウイルスが交じた部分と分離できる。

さらに同教室が開発した超高感度の検出法で、体外受精する前の精子と、受精卵を含む溶液で、HIVの遺伝子が含まれていないか二重チェックする。この方法で、「感染症への安全性はほぼ100パーセントになる」（花房医師）という。

同大では、今年2月と6月に体外受精を実施。ともに1度の体外受精で妊娠が確認され、数回の血液検査などから、妻や胎児も感染していないと判定した。

花房医師は「感染覚悟で自然妊娠を試みる夫婦を何例も見えてきて、なんとかしなければという思いだった。40人以上の希望者があり、今後も感染者夫婦に希望を持ってもらえるように、情報公開しながら進めていきたい」としている。

○鼻に噴霧するエイズワクチンの開発 鹿児島大

8月18日・朝日新聞

鼻孔に噴霧してHIVの感染を防ぐワクチン開発が進んでいる。鹿児島大の研究グループがマウスで実験し、HIVを抑える抗体を粘膜内に作ることに成功した。秋には京都大と共同でサルを使った感染予防実験を始める予定だ。

鹿児島大医学部の馬場昌範教授は同大工学部の明石満教授と協力し、ウイルスを吸着する直径400ナノメートル（ナノは10億分の1）の超微粒子をつくった。感染力をなくす処理をしたHIVをその微粒子にくっつけ、雌マウスの鼻に注入した。その結果、膣（ちつ）の粘膜にHIVの増殖を抑える抗体ができた。

鼻の粘膜にウイルスなどの抗原を入れると全身の粘膜に抗体ができることは知られている。だが、HIVの場合、無害化したウイルスをそのまま鼻の粘膜にいれても抗体ができる前に排除されてしまい、ワクチンとして利用できなかった。超微粒子は粘膜の奥深くまで入っていき、何時間もとどまるため、うまく抗体ができた。とくに性行為での感染を防ぐ効果が期待できる。この成果は近く英国のウイルス学専門誌に掲載される。

マウスはエイズにかからないので、今回の実験では本当に予防できるかどうかは確かめられない。そこでサルのエイズ研究で知られる京都大ウイルス研究所に協力を求め、アカゲザルを使って実際に感染を防げるか実験することにした。

○若者の大半、性教育に不満 厚労省の厚生科学研究

8月20日・共同通信

増加が心配されている性感染症の予防法について、十代を中心とした若者の大半が「恥ずかしがらずに堂々と教えてほしい」と、学校などでの性教育に不満を持っていることが厚生労働省の厚生科学研究で十九日、分かった。

東京の繁華街で約三百組のカップルにアンケートを実施したところ、87.2%が恥ずかしがる大人に不満を感じており、62.6%が「中高生はセックスをしないという前提の話し方はしらける」と答えた。アンケートに答えた十代女性の77.1%がセックスの経験があるとした。研究グループの木原雅子・広島大医学部助手（公衆衛生学）は「若者は情報を求めており、重要なのは教える側の大人の役割だ」と指摘している。

性感染症にかかるとエイズウイルス（HIV）に感染する危険性が上昇、女性の場合は不妊になる恐れがあることも指摘されている。厚労省の調べでは、性感染症の感染事例は数年前から増加傾向にあり、十代のまん延も懸念されている。

こうしたことから研究グループは今年一月と二月、渋谷と池袋の繁華街で、男女のカップルのうち女性が十代のケースを選んで調査票の記入を依頼、計六百二人から回答を得た。年齢は男性13〜27歳、女性13〜17歳だった。

感染予防の考え方に関する意見では「危ないことは危ないと教えてほしい」が88.9%で最も多く、74.4%が「ふざけ半分な言い方はしてほしくない」と答えた。「相談できる人や病院など、性感染症が心配なときすぐに役立つ情報を教えてほしい」「教える人自身の経験だと身近に感じられて聞きやすい」という大人への要望がいずれも70%を超えた。

○ネットで無料配布、エイズ防止PCゲーム大人気

8月23日・読売新聞

パソコンゲームでエイズ感染拡大を食い止める？——スイス政府が若者のエイズ予防意識を高めるよう独自に開発したパソコンゲームが、インターネット上で大人気を集めている。国内のエイズの予防教育関係者も「面白い試みであり、今後の啓発キャンペーンの参考にもなる」と評価している。

スイス連邦保健局は今年4月、エイズ予防キャンペーンの一環としてホームページを作成した。だが、読まれなけれ

ば意味がないため、インターネットをよく使う世代（15—35歳）の関心を引こうと、このゲームを開発。インターネット上で無料配布したところ、大反響を呼び、すでに世界で1400万人以上が利用しているという。

同局は「ゲームは楽しくて分かりやすい上、コンドームの使用がエイズを防ぐには1番優れた方法であることをよく教えてくれる」としている。最近の若者には「エイズは過去の問題だ」という思い込みがあり、警戒心を呼び覚ますには、一風変わった手法でも良かった、と同局は話す。利用者側からは「役立つ情報がうまく盛り込まれていて良い」と好評を得ている。来年1月には続編を出す予定。ゲームの入手などは<http://www.stopaids.ch>まで。

○中国河南省の村で人口の2割がHIV感染の可能性

8月23日・毎日新聞

中国河南省文楼村で、エイズウイルス（HIV）感染者数が村人口の約2割、600人前後に上る可能性があることが23日、中国政府の調査で明らかになった。同省では「血頭」と呼ばれるブローカーが暗躍、貧しい村民たちが違法に売血を繰り返していた。当局はHIV禍を知りながら、2年近く公表せず、大規模な集団感染を招いたとみられる。

中国衛生省の殷大奎（いんだいけい）次官が毎日新聞の質問に答えたところによると、衛生省が昨年4月、全村民のほぼ半数の1645人にHIV抗体検査をした結果、318人（19%）に陽性反応が出た。調査対象者のうち、売血の経験があるのは568人で、うち半数近い244人（42.9%）が陽性だった。HIVに汚染された注射針を売血で繰り返し使い、感染した可能性が高い。衛生省は、99年11月にも同村で売血経験者1310人を対象に調査を実施。陽性率がすでに43%に達することを確認していたが、公にしていなかった。

○エイズ感染率が大幅低下 ウガンダ、隠さず対策奏功

8月24日・共同通信

エイズのまん延に苦しむアフリカ諸国の中で、啓発活動に早くから取り組んだウガンダ政府がHIV感染率の大幅な低下を実現させ、注目されている。コンドーム使用奨励をめぐるカトリック教会との対立も解消しつつあり、エイズ対策を指導するウガンダエイズ委員会は「エイズまん延を国内外に隠さずに対策に取り組んだ結果だ」としている。

国連エイズ合同計画（UNAIDS）やウガンダエイズ委員会によると、成人のHIV感染率は1990年代初頭には14%でアフリカ諸国の中でも最悪の水準だったが、2000年末には6%に低下した。1986年から国を挙げてエイズ予防キャンペーンに取り組み、コンドーム使用やエイズへの理解を深めるためのパンフレットを都市部だけでなく小さな村にまで配布。時にはムセベニ大統領自らが先頭に立って啓発を進めた結果、現在ではHIV感染を隠す患者も少なくなったという。

ケニアや南アフリカなどでは、コンドーム使用を奨励する政府を、不必要な性行為を助長するなど教会が批判しているが、ウガンダでは現在、エイズ委員会の委員長を教会の元司教が務めるまでになった。

○＜薬価表示＞国立大付属病院で薬剤名や価格の明細書発行へ

8月24日・毎日新聞

サリドマイドやエイズなどの薬害被害者が「薬害根絶デー」と位置付けた24日、全国薬害被害者団体連絡協議会（花井十伍代表世話人）は文部科学省、厚生労働省に対し、薬害の歴史を教科書に盛り込むことや、医師などの国家試験に薬害問題を取り上げるよう要望した。また、医療機関の情報開示を求めたのに対し、文科省は、今後4～5年をかけて全国42の国立大学付属病院で、薬剤名や価格を記した明細書を順次発行していく考えを明らかにした。

同省医学教育課によると、既に熊本大学付属病院など一部の病院では、薬剤の説明書に添える形で明細書を発行している。今回の要望を受けて、すべての国立大学付属病院で実施していくことになった。

○HIV感染者支援でタイに縫いぐるみ製造販売店

8月27日・読売新聞

エイズウイルス（HIV）に感染したタイの農村主婦らを支援しようと、日本人のHIV感染者らが中心となって進めている「ティピア・プロジェクト」の第1号店が26日、タイ北部の古都チェンマイにオープンした。このプロジェクトは子供たちに人気のあるクマの縫いぐるみティピアの製造、販売を通じ、感染者の経済的自立を図るもので、国を越えた感染者同士の協力事業として注目されている。プロジェクトを進めているのは、HIV感染者で、民間活動団体「レッド・ノット」（東京）の代表を務める谷川徹さん（32）。昨年1月からHIV感染率の高いタイ北部のパヤオ県、チェン

マイ県を訪れ、地元主婦ら60人を対象に、自らの経験を生かし縫製の指導を始めた。谷川さんは「エイズ予防財団など多数の協力で開店することができた。軌道に乗せて、感染者の自立を助け、生きる希望を持たせたい」と話している。

○中国のエイズ患者 10年後には1000万人に

8月28日・NHKニュース

中国の医療当局者は、中国ではエイズ患者の発生率が急速に高まっているため、このまま有効な対策を講じないかぎり、10年後には感染者は世界最大の1千万人に達するだろうという見通しを明らかにしました。

これは、香港で開かれている国際会議の席上、中国でエイズ対策を担当する当局者が明らかにしたものです。

それによりますと、中国でのエイズ感染者は去年末現在で60万人とみられていて、沿岸部の大都市や国境地帯から内陸部の地方都市にも広がっているとしています。そのうち半数以上は麻薬の常習者によるもので、また性接触によるものが30パーセントを占めるなど、感染は急速な広がりをみせる段階に達しているとしています。

そのうえでこの当局者は、中国では感染の予防対策にあたる全国的な組織や体制が整っていないため、このまま有効な対策を講じないかぎり、10年後の2010年には感染者は世界最大の1千万人に達するだろうという見通しを明らかにしました。中国のエイズ対策にあたる当局者がこうした見通しを明らかにしたのはこれが初めてです。

○HIV感染の移植患者退院 経過は良好、東大病院

8月30日・共同通信

薬害エイズのためエイズウイルス（HIV）とC型肝炎ウイルスに重複感染し、四月に東大病院で生体肝移植を受けた西日本在住の男性（42）は、移植手術終了から127日目の三十日退院した。経過は良好で血友病が治ったほか、C型肝炎ウイルス、HIVとも検出できないほど抑えられ、普通の生活をして問題ないという。病院によると、男性は「長かったが、これほど元気になるとは思えなかった。手術の成功が他の患者の励みになればうれしい」と話している。

男性はエイズの発症は薬で抑えられていたが、重複感染したC型肝炎ウイルスのため末期の肝硬変となり、四月二十五日から二十六日にかけて、兄から肝臓の一部を提供され生体肝移植を受けた。移植後、抗HIV薬が肝臓に負担になることなどが心配されたが、HIV量が低いレベルで推移したため、抗HIV薬は使わずに済んだ。

六月から軽度の肝炎の症状が見られた。しかし、インターフェロンなどを使った治療で、良好に推移。血友病については移植された肝臓により血液凝固因子が作られるため、完治した。

肝炎やエイズの治療に当たった感染症内科の木村哲教授は「いろんなリスクを持った治療法だったが、患者が勇気をもってチャレンジし、生体肝移植という選択肢もあることを証明できた。患者の勇気に感謝したい」と述べた。

○エイズ薬価格4割値下げ ブラジルとスイスの会社同意

9月1日・朝日新聞

ブラジル政府は31日、スイス製薬大手ロシュ社のエイズ治療薬「ピラセプト」の価格について、ブラジルの要求を同社が受け入れ、現行価格を4割下げることと合意したと発表した。エイズ対策に悩む開発途上各国は治療薬の価格を「高すぎる」と批判しており、ほかの国での価格にも影響を与えそうだ。

○〈エイズ〉注射針で？死亡か 出入りの清掃業者 都内の病院

9月8日・毎日新聞

東京都内の医療機関でエイズと診断され、死亡した男性（57）のエイズ発生届に、この男性が病院手術室に出入りしていた清掃業者で、たびたび注射針が刺さっていたとの記載があったことが8日分かった。発生届は、男性の死後、感染症法に基づいて5月11日に都内の保健所に提出され、厚生労働省が7月31日のエイズ動向委員会と報告していた。

同省によると、男性がエイズと診断されたのは5月3日。その後11日までの間に死亡した。注射針が刺さる事故とエイズ発症との因果関係ははっきりしないが、同省は「明確に針が刺さった例が記載されていたのは初めて」と話している。今後、関係省庁に対し、情報提供するとともに、医療廃棄物の取り扱いや医療機関の清掃の際、事故の未然防止に向けた取り組みを申し入れることを検討している。

注：この記事データは各社の「速報記事」等をもとに編集したものです。